March 2010

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報　第62号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Pages 1 ……
巻頭言
ガーデン・ガーデニング
伊東　理

Page 2 ……
実習調査報告
奄美大島龍郷町での実習調査
鈴木隆洋

Page 3 ……
秋の日帰り巡検
寺内町「堅田」と門前町「坂本」の歴史
山田翔太

Page 4-5 ……
研究ノート
イギリスのナショナル・カリキュラムについて
小泉邦彦

Page 6 ……
学窓から
大学生活を振り返って
井村　幸

院生・学部生の業績
(2009.1～2009.12)

Page 7 ……
教室だより

Page 8 ……
随想
栃木県、北部足尾山地付近の調査から教えられたこと
石井孝行

Page 2-3,6-7
卒業生・修了生からの一言

ガーデン・ガーデニング

伊東　理

日本では、公園の散策や庭園を楽しむといったことはほとんどしなくなりましたが、海外に出た時には、仕事の合間や日曜日などを活かして、公園の散策や他人のお庭を拝見して楽しんでいます。また、最近は時間と体力がなくなったので、好きな園芸をやめていますが、庭いじりをしていてそこに蝶などやってきたら最高の気分です。なぜ私が園芸を好むのか。その理由は明確です。私の仕事である教育・研究は皮肉にも時間や手間をかけたからといって必ずしも成果が上がるとは限りません。なまじ教えない方がかえって伸びる学生も少なくないし、時間をかけた研究よりも短時間でさっと書いた研究が予想外な評価を受けるなど、わからないものです。一方、園芸は、1本でも多くの雑草を抜き、少しでも枯れた花を摘みとれば、庭は確実に綺麗になります。すなわち、私にとって園芸は要した時間や努力とその成果がほぼ正比例となるので、大変精神衛生のよい息抜きになります（夕食後の皿洗いも時には同様な意味で楽しいことにもなります）。私とガーデンはミスマッチと言われそうですが、ガーデンに関して想うことを記してみることにします。

[無謀な日本でのイングリッシュガーデン]　今から10年ほど前、イギリスでは大変綺麗なイングリシュガーデンが日本でも流行しました。素人・プロにかかわらず多くの人がそれをトライしましたが、私も含め失敗した人が圧倒的で、今や完全に下火です。

それは、気候風土に合わないガーデニングというものが、しょせん無謀なものであったということでしょう。日本でイギリスのガーデンのマネをしようものなら管理が大変です。春から秋まで途方もない雑草抜き（除草）や猛暑の夏場での欠かさぬ水やりを続けないとしたら、長草の雑草のなかに垣間見られる短草の花をベースにした全く美的でないイングリッシュガーデンとなり、果ては夏場に枯れ草ガーデンになるだけです。加えて1年草ばかりで、毎年植え替えが必至です。イギリスでは除草は不要で水やりも楽ですし、雑草もそれほど繁茂しません。「中耕除草農業」の世界である日本では、死ぬほど頑張らないと美しいイングリシュガーデンを維持するのは困難です。体に良くないガーデニングです。

[日本に合ったガーデンとは]　それでは日本に合った庭園とはどのようなものでしょうか。私見を述べます。その一つは、間違いなく石庭ではないかと思います。岩石には草は生えないし、龍安寺のような石庭（枯山水）では草が生えても除草は楽です。東アジアの石庭の発達は、庭園を省力で美的な状態で維持できる持続可能な庭園として発達したのだ、というのは言い過ぎでしょうか。

もう一つは植物の選択が重要と思います。ウィーン・プラハ・ベルリンなどのいわゆる中欧の都市の公園を訪れた時、それらの庭園がドイツアヤメ、カンナ、アマリリスをベースにしていて、子供の頃によくみたこれらの花に何ともいえない懐かしさを痛感しました。住宅事情もあるのでしょうが、日本のガーデンにみる花はどんどんと小型化し、かつ一年草が幅を効かしてきたのに対して、かつてのカンナを筆頭として中～大型の多年草の花（球根花）がみられなくなってきたように思います。例えば、これらの外来花をベースにして西洋庭園の伝統を保っている東京の有栖川公園は一見の価値があるところです。多少雑草が生えても背丈の高さでカバーできて猛暑に耐えられるし、毎年植える必要のないこれらの球根花は日本の風土にかなっているように思われます。日本の花でいえば、中型の菊、百合、あやめなどをもっと再評価してもいいのではないでしょうか。

イングリッシュガーデンは維持可能な箱庭（コンテナガーデン）にとどめ、それ以外の庭は日本の伝統や風土に合った植物選択をすべきではないか、と思います。また、昨今の日本では目まぐるしく新しい小型の花々が続々と登場しては、次々と消滅していきます。日本のガーデニングや花もまるで日本社会を象徴するように・・。

それにつけても、日本の園芸家は最近の日本の園芸事情やその動向をどのようにお考えなのだろうか。彼（彼女）らには、もっと積極的に発言して貰いたいし、風土に合った現代的庭づくりの提案をして貰いたいものと思います。

（本学教授）

2009年度 卒業生・修了生からの一言

逸本茉莉子
地理学専修に入って、個人的な旅行などでは行かないような場所にもたくさん行けました。4年間本当に楽しかったです。ありがとうございました。

大竹かおり
地理に関して全く知識のなかった私がここまで来れたのは、先生やここで知り合った仲間のおかげです。苦しいことも楽しいこともたくさんの充実した4年間を過ごすことができました。

重村昌利
岡山巡検や壱岐での調査など、地理学専修に入らないと経験できない刺激的な大学生活を送れました。ありがとうございました。

篠田善典
地理学教室で得た大きなことは2つ。1つは行動力。もう1つは仲間。先生方や院生方、そして何より4回生のみんなに出会えたことに感謝しています。ありがとうございました。

宿利広和
4年間でフィールドワークとして御坊、美作、壱岐など様々な土地に行きました。これほどたくさんの地に行けるのは地理学専修ならではのことではないかと思います。人にも恵まれ、楽しい学生生活を送ることができました。地理学専修に進んでよかったです。ありがとうございました。

玉置奈都子
地理学で巡検に行き、フィールドワークから多くのことを学び、貴重な経験になりました。先生、皆さんと過ごせて楽しかったです。ありがとうございました。

実習調査報告

奄美大島龍郷町での実習調査

鈴木　隆洋

私たち3回生は、去る10月5日～10月8日に3泊4日の日程で鹿児島県大島郡龍郷町での実習調査を行ってきました。初日は空路で奄美入りしたのち、全員で奄美パーク、田中一村記念館、奄美大島紬村を駆け足で回り、その後に龍郷町役場にて、龍郷町長をはじめ役場の職員の方々に町の概要についての説明を受けた後、全員で記念撮影。そして実習期間中に宿となるカレッタハウスで翌日からの調査に向けてのミーティングを行いました。2日目からは自然・産業・民族・観光・行政の各班に分かれての調査を開始し、産業班の私は奄美の伝統産業である大島紬と黒糖焼酎の調査に向かいました。初日に全員で訪れた大島紬村を再び訪問し、取締役の方に紬業の歴史や現況について聞き取り調査をした後、併設の織場にて本場大島紬の製織工程を見学し、その複雑多様な製法に目を奪われました。次いで訪れた黒糖焼酎の酒造工場では、焼酎粕の再資源化の取り組みを見学することが出来ました。今回の実習調査をするにあたっての産業班のテーマは、酒造、畜産、農業など各産業での資源循環が行われているかどうかに焦点を当てることであり、その一端を確かめることができました。3日目にはかねてから心配していた台風が見事に襲来し、南国の自然のパワーを体感することが出来ました。最終日の昼食に食べた奄美の郷土料理である鶏飯もとてもおいしゅうございました。実習期間はあっという間で、「あれもこれも聞いておけばよかった」と思っていることは数知れず、後悔したことも多々ありました。それでも、現地の方々にたくさんの話を聞かせて頂く事ができ、愉快な仲間や大学院の先輩とともに調査が出来て本当によかったと思っています。初めての本格的な実習調査を通して、何より「地理」の楽しさ、フィールドワークの楽しさを体全体で感じることが出来た、貴重な体験になりました。　（本学3回生）

奄美大島　龍郷町の地理（地理学実習報告書34、2009）

はじめに
Ⅰ　シマの町　龍郷町
Ⅱ　赤尾木の海岸地形
Ⅲ　奄美大島の産業
　—資源循環モデルを例に：農業と農産加工業—
Ⅳ　奄美観光の実態と将来
Ⅴ　秋名・幾里の集落と民俗文化
Ⅵ　龍郷町における行動空間と市町村合併問題
Ⅶ　まとめと提言

秋の日帰り巡検

寺内町「堅田」と門前町「坂本」の歴史

山田　翔太

2009年10月25日に、滋賀県湖西地方の堅田と坂本での日帰り巡検に参加した。大学院生の先輩たちの資料をもとに現地の様子を見て回り、時々説明を聞きながら、その場所がどういった現状なのか、その背景などを理解した。説明はとても分かりやすく、資料も丁寧に図や文章が書かれてあったので、準備をしていた人たちの努力がひしひしと伝わっていた。

最初は堅田へ行き、徒歩で琵琶湖の方面へと向かった。琵琶湖の内湖では真珠の養殖が行われていることを知った。それは琵琶湖パールという淡水真珠で、世界中から高く評価を受けるほどの光沢があるということを後に知って驚きだった。次に堅田漁港へ向かい琵琶湖を眺めた。自分の地元、京都では琵琶湖の水を飲用水としている所があるが、あまりおいしくないということを何度が聞いていて、水質はあまり良くないのではと思っていた。見た目ではきれいかどうかは分からなかったが、浮御堂を訪れた時には水鳥が水面に集まっていて、魚が何匹か泳いでいたのも見えたので、それほど水質が悪いというわけではなかったことが分かった。琵琶湖では生物相が豊かであると説明を受けたが、そのことも理解することができた。しかし、オオクチバスのような外来魚が生態系に影響を与え、水質の汚濁にもつながることを知り、琵琶湖のような広大なところではかなり深刻な問題になるだろうと思った。琵琶湖大橋を見た時に、この橋によって湖西地方の産業発展につながったことを知り、その重要さをしることもできた。その後湖族の郷資料館へと向かい、資料館の方の話を聞き、堅田の歴史を深く知ることができた。

昼食を取った後坂本へと場所を移り、日吉大社へと向かった。木造の小さめの家屋が多かった堅田とは違って、大きめの家屋が多くあった。日吉大社に着いて一時間見て回ったが、この神社は境内が複数あってしかも広く、今まで見て来たことのある神社とは一線を画していたような感じだった。様々な神様が祭られていて、鬼門や災難除けの社とされているのも知ることができた。中でも猿が神の使いとされていることがとても興味深かった。自由行動の一時間、辺りを歩き回っていたが、境内の奥のほうまで進んでみようと思い林の中の奥まで行ってみると、川が流れているような音が聞こえたのでさらに奥まで行ってみると小さい橋がかかっていて、その下には川とは言いにくいが水が流れていた。わりと勢いがあって段差があるところでは小さい滝のようになっていて、透明度も結構あったので奥地にいいポイントがあったと喜んだが、上のほうに階段があって登ってみるとそこは日吉大社の入り口のところだった。自分ひとりだけ奥地まで行って絶景的なところを発見したと思っていたら、最初に来ていた日吉大社の入り口の、下の方に戻って来ていただけだった。

日吉大社を後にして、滋賀門跡前の通りの石垣を見て歩いた。石垣の外見は寄せあわせの石で固められていて乱雑な印象があったが、この積み方は穴太衆積みと呼ばれるもので、石垣は高く積めば積むほど崩れやすくなるために石工集団によって積み上げられ、実は高い技術によって積み上げられていたことが分かった。どうやって形の大きく違う石を崩さすに積めることができたのかということが疑問に思った。

今回の巡検で自分の予想していた以上に知らなかったことを知ることができて、さらに地理学の面白さが深まったと感じている。最後に今回の巡検でお世話になった先生、大学院生の方々、ありがとうございました。来年には自分たちも頑張って調査していきたいと思います。

（学部２回生）

大長和代
巡検や調査を通してその土地のことを知る楽しさを学び、地理学を学ぶ前と旅行の楽しみ方が変わったと思います。たくさんの仲間もでき、充実した学生生活を過ごすことができました。ありがとうございました。

董　振江
私は中国留学生として日本に来たが、関西大学地理学教室での３年間は、とても楽しかった。４月、大学院に行くことを決めた。皆さん、中国に関する興味があれば、ぜひ話しかけてください。

豊田有加里
地理学は私にとってとても居心地の良い場所でした。大変なこともたくさんありましたが、それが良い思い出になったのは周りで支えて下さった先生方、友人のおかげです。本当にありがとうございました!!

西口千絵
あっという間でしたが、中身の詰まった大学生活でした。地理学教室の個性豊かな仲間や先生方と、たくさんの貴重な経験ができたことを誇りに思います。ありがとうございました。

林　依澄
地理学教室での作業は大変なことがたくさんあったけれど、今となってはいい思い出です。地理学を通して出会えた人、学べたこと、経験できたことは多く、私にとってはどれも大切なものです。４年間本当にありがとうございます。

廣田琢哉
津山や壱岐等の調査で地理学の奥深さを痛感しました。頼りになる同期の皆、素晴しい先輩方、お世話になりました。先生方・後輩たちには、もうちょいよろしくお願いしまーす！

研究ノート

イギリスのナショナル・カリキュラムについて

小泉　邦彦

1　ＵＫのナショナル・カリキュラム編成の動き

イギリスの教育制度は1988年の教育改革法の制定以来、ナショナル・カリキュラム制度の導入をはじめとして、大きく変化してきた。国家をあげて義務教育の改革を行ってきたといえる。教育改革が行なわれてきたのは、イギリス社会の次のようなことが背景となっている。

○　英国の産業や技術の凋落が顕著となる。

○　イギリスの企業が外国企業に買収される。

この要因としては次の４点が指摘される。

・　公共性を無視した強い労働組合の力

・　工場の新規改善の遅れ

・　政府による手厚い保護による生産性の低下

・　伝統を重んじる国民性

○　公立学校の学力低下。

・　教職員の教育指導レベルの低さ

・　青少年の犯罪の増加

・　公民的資質の低下、公共心の低下

ナショナル・カリキュラムは保守党のサッチャー、メイジャー政権が大なたを振るい、イギリスの体質改善のため企業と教育に対し大改造を計画し、実行に移したものである。

イギリスでは地方教育局ごとの地方分権が従来きわめて強く、日本のような学習指導要領は存在しなかった。

パブリックスクールと呼ばれる私立の全寮制の学校が存在し、富裕層（貴族階級）子女はそこで高等教育を受けるのが一般的である。そのため先祖代々そのパブリックスクール卒業という家が多く存在する。かつての大学入学者はパブリックスクール卒業者が大半を占めていたといわれる。当然そのような家庭の子女は英国において支配者階層を形成していく。

かかる環境のなかで、各地域・各校でばらばらに教えられていた教科を国で統一し、発達段階に応じて教育の内容を決め、小学校から高等学校までのカリキュラムを発達段階に応じて計画的また具体的に組み建てたのが、ナショナル・カリキュラムである。

イギリスの義務教育は、５歳から始まり16歳までの11年間である。その後２年間のシックスフォームを経て、このときに卒業認定試験を受けることとなる（初等学校、総合制中学校・モダンスクール、シックスフォーム）。

年齢とカリキュラムの実施時期を表にすると以下のようになる（表１）。

小学校２年で統一テストがあり、そこでは生徒と共に教師の指導力も問われることとなる。この時期には、地理教育などでは空間の概念や地域、特に身近な地域に中心を置いている。試験の内容はそれほど難しくはなく、算数では基本の計算、英語（英国での国語）ではアルファ

表１　イギリスのカリキュラムの段階と学年

年　齢	段　　階	学　　年	試　　験
３－４			
４－５	基　　礎	受　　付	
５－６	キーステージ１	第１学年	
６－７		第２学年	全国共通試験（英語・算数）
７－８	キーステージ２	第３学年	
８－９		第４学年	
９－10		第５学年	
10－11		第６学年	全国共通試験（英語・算数・理科）
11－12	キーステージ３	第７学年	
12－13		第８学年	
13－14		第９学年	全国共通試験（英語・数学・理科）
14－15	キーステージ４	第10学年	中等教育終了一般資格（ＧＣＳＥ）試験
15－16		第11学年	中等教育終了一般資格（ＧＣＳＥ）試験

ベットが書け文章が読める能力の獲得が中心である。

最後の中等教育終了資格は、英語と数学などを含む五つの教科で資格を取れば修了とみなされる。

日本では英数国理社の五教科重視であるが、英国では五教科が苦手な生徒は副教科を選択しても、資格試験を合格すれば修了とみなされる。副教科としては、美容やダンス、音楽、バレーなどさまざまな分野が準備されている。

2　英国が目指すシティズンシップ教育とは

ナショナル・カリキュラムでは、各キーステージ（以下、KSと略す）ごとに主要概念が示されている。これをシティズンシップ教育を例にしてみると、次のようである。

ＫＳ１・ＫＳ２での、シティズンシップ教育が目指す知識・技能・理解

1　市民として積極的な役割を果たすことへの準備
2　健康で安全なライフスタイルの発展
3　自己の成長と責任の尊重など、人間としての基本的能力の最も重要な部分の育成
4　人々の間の良好な関係と差異の尊重

ＫＳ３・ＫＳ４での、シティズンシップ教育が目指す主要概念と学習プロセス

1　主要概念
- 民主主義と正義
- 権利と責任
- アイデンティティと多様性の尊重、イギリスで共に生きる（共生）

2　鍵となる学習過程
- 批判的思考と探求
- 提案と発表
- 思慮深く責任ある活動

また、教師用の指導書（シティズンシップ　スキームワーク）に事細かく書かれており、教師の能力差が生じないように、また生徒が同じレベルで学べるように準備されていることも特記できる。

3　カリキュラム改訂とその社会的背景

英国では、1980年代末から1990年代初頭の旧ソ連や東ヨーロッパの社会主義国家の崩壊により、大きく社会変化が起きた。従来から旧植民地からの移民を積極的に受け入れてきた英国では、民族等国ごとの棲み分けが進んでおり、職業や住居などではその差異が顕著にみられる。ただ同じ英語圏であることから、生活習慣や感覚等は共有できていた。しかし、東欧諸国からの労働者・移民が増加するにつれて、言語やアイデンティティの異なる民族が増加することにより、生活環境が大きく変化してきた。

例を挙げれば、町中にゴミをほらない、入り口の扉は後に人がいれば開けてあげる、人が多くいるところでは喫煙しない、公園ではつばを吐かない等のエチケットが守られてきたが、新移民の増加によりそれらが守れなくなってきている。このような現実に直面して、公教育の場でこれまで以上に全教科を通じてシティズンシップの育成を目的とした教育が重要視されるようになってきた。

例えば、シティズンシップを形成するために、生徒が地域の商店で働いたり、ボランティア活動などの体験学習も学校内部試験の対象となっている。「自分が関わった学校もしくは地域におけるシティズンシップ活動についてのレポート（1500～2000語）」が修了試験の評価の40%を占めている。

1991年にイギリスのナショナル・カリキュラムは初版が出されたが、その内容は難しく、教員による評価方法も難しかったため、1995年に改訂版が出された。この95年版では、探求学習の位置づけが強まった。2000年版ではさらに探求学習を積極的に用いるべきとし、探求と技能の手順も丁寧に示された。2007年版では、探求学習での習得内容がさらに具体的に示され、問題解決のための分析技術、創造的な考えが表明されている。

なお、「地理」のナショナル・カリキュラムについては、下記の文献中の野間晴雄・小泉邦彦を参照して頂きたい。

参照文献

・UK National, Curriculum1991/1995/2007/
・野間晴雄・小泉邦彦「英国2007年版『ナショナル・カリキュラム地理』キーステージ３の内容とその特色」関西大学文学論集、第59巻第２号、2009、44-72頁。
・志村　喬「英国『ナショナル・カリキュラム（2000年版）』開発とジオグラフィカル・スキル」、地理科学 Vol.59、No.3、2004、149-159頁。

（こいずみ　くにひこ：関西大学大学院・文学研究科博士課程後期課程、西宮市立上ヶ原中学校教諭）

堀口美沙
地理学で自分の興味外の分野にも、多くの面白さがあると気付くことが出来ました。先生方や院生の方々、教室のみんなにはお世話になりっぱなしな三年間でした。ありがとうございました。

牧野有紗
この4年間、とても充実した大学生活を送ることができました。地理は奥が深くて、楽しかったです。ありがとうございました。

増田　妃
卒業できたのは皆様のおかげです。ありがとうございました。大学院ではまじめに研究します。よろしくお願いします。

宮本直弥
地理学で得た経験、仲間、逢えた方々は僕の一生の財産です。この財産を今後に活かし、社会で活躍します。地理学の方々、お世話になりました。

吉井　悠
巡検や実習調査など、ほかの専修ではなかなか味わえないことをたくさん経験させてもらいました。しんどいことも多かったですが実のある3年間だったと思います。ありがとうございました。

渡邊瑛子
4年間色々ありましたが、自身の成長も含め、大学で地理学を研究してきて本当に良かったと感じています。今までお世話になりました。ありがとうございました。

吉田俊輔
1年間卒業が遅れましたが、それでも後悔していません。地理学・地域環境学専修にして本当によかったと思います！

学窓から　大学生活を振り返って

井村　幸

大学生活も残すところ一年弱である。大学に入学した日が本当につい昨日のことのように思えてしまう。今こうして自分の大学生活を思い返しいてみると、楽しかったり辛かったりと様々な記憶が蘇ってくる。

高校時代は地理の授業が大好きだった。地名や山脈、川の名前は楽しく覚えられた。そして、「大学生になったら地元の沖縄を出て地理を学べる大学に進学しよう」と心に決め、関西大学文学部総合人文学科の地理学・地域環境コースへ進学したのだった。

しかし、最初は高校の地理の授業とのあまりの違いに戸惑ってばかりいた。まず、テキストに載っている地理学者の名前はだれ一人知らなかった。また、今まで覚えてきた山脈や川は実際行ってみたことがなかったため、授業のフィールドワークで初めて訪れた時は非常に感動したと同時に、「私が高校時代に学んだことは、まだ地理のほんの一部でしか過ぎなかったのか」ということに気付かされたことは今でも鮮明に覚えている。

私は地理学を学ぶ際に最も重要なことは、「実際に訪れてみて、自分の目で見て確かめる」ということではないだろうかと思っている。関西大学の地理学教室にはそのようなカリキュラムがたくさん用意されており、それまであまり馴染みがなかった地域へも訪れる機会が多くなった。また、日ごろ馴染みのある近場も、よく目を凝らして歩いてみると新たな発見があるのだということもこの教室のフィールドワークの授業で教わった。

そして、大学三回の秋に行われた奄美実習調査は私の大学生活で忘れられない経験となったに違いない。六月頃から、各班に分かれて班の仲間や大学院生と共に文献などで事前学習をして、三泊四日間、奄美大島龍郷町に滞在し朝から夕方まで実習調査を行った。滞在中、台風が直撃し調査が思うように行えなくなりそうになったが、現地の人の協力もあって無事実習調査を終えることができた。今は、この奄美実習の報告書作成に追われ忙しい毎日を送っている。

私は現在、卒業論文の下準備や就職活動に取り組んでおり、「もう、大学を卒業する時が近付いているのだな」と考える日が多くなっている。大学に入学し、この地理学教室からはたくさんのことを教えてもらった。私がこの教室で学べる時間は限られているが、残りの学生生活をしっかり謳歌しながら後悔のない学生生活を送っていきたいと考えている。最後に、地理学を学びたいと考えている学生さんは是非、関西大学地理学教室の門をたたいてみることをお勧めしたい。　（学部3回生）

院生・学部生の業績（2009.1～12）

【論文】

野間晴雄・小泉邦彦。2009。英国の2007年版『ナショナル・カリキュラム地理』キーステージ3の内容とその特色。関西大学文学論集、59(2)、pp.49-72。

堀内千加、2009。京都市における住宅地の地域的分化と人口・住宅の動向。史泉109、pp.34-54。

堀内千加、2009。京都市中心部におけるマンション開発と人口増加の動向。経済地理学年報55-3、pp.1-22。

松井幸一、2009。近世岐阜町における都市軸形成とその後の変容。史泉110、pp.18-35。

齋藤鮎子、2009。書評（武田尚子：もんじゃの社会史 東京・月島の近・現代の変容。青弓社 2009年刊行）史泉110、pp.41-46。

【学会発表】

堀内千加、2009。神戸市における1990年以降の人口とマンション開発の地域的動向。2009年度人文地理学会大会

叶晨、2009。北摂茨木市域に見られる明治中期以降の植生変遷。関西大学史学・地理学会2009年度大会（関西大学）

齋藤鮎子、2009。「富士宮やきそば」によるまちおこしと観光化。2009年度日本地理教育学会大会

齋藤鮎子、2009。「富士宮やきそば」によるまちおこしと観光化。地域再生大学にて講演。富士宮市役所

教室だより

■地理学・地域環境学実習調査

平成21年10月5日（月）～8日（木）にかけて鹿児島県大島郡龍郷町（奄美大島）で実習調査を実施した。指導教員は、高橋誠一・野間晴雄。TA 1名、院生6名、3回生17名、ベトナム・ネパールからの留学生3名の29名で実施。滞在中に台風に見舞われ調査も一時滞ったが、無事に実習を終えることができた。調査内容は海岸地形、生活・行政、農業、民俗行事、観光などの項目で、3月に報告書を刊行する予定。詳しくは、2頁を参照。

■秋の日帰り巡検報告

平成21年10月25日（日）教室の日帰り巡検が開催された。さわやかな晴天のもと、学部2回生25名、3回生17名、院生6名、先生2名、OG 1名、留学生2名の計53名で、寺内町「堅田」と門前町「坂本」をテーマに滋賀県の堅田と坂本を巡った。

コース：JR堅田駅－内湖（真珠養殖）－堅田漁港（貝捨て場、琵琶湖大橋）－遊歩道－浮御堂－湖族の郷資料館－堅田キリスト教会－堅田駅前周辺（新興住宅、交通）－〈昼食〉－ JR比叡山坂本駅－日吉大社－重伝建地区（穴太衆積みの石垣）－京阪坂本駅（現地解散）

■12月の地理学研究会例会

平成21年12月12日（土）15時より地理学研究会の例会が開催された。3回生によって奄美大島実習旅行の報告がされたのち、芦田淳一「近世寺院の屋根と景観」、野田晋一 「日本の林業の現状と課題―自身の経験を踏まえて―」、高橋誠一 「琉球と日本の歴史観と伝統的地理思想」の講演がおこなわれた。例会終了後は第1学舎の食堂で懇親会が開催され、お互いの親交を深めた。

■教員外国出張

伊東理：2009年8月18日～9月2日　科研費による英国のセンターの動向に関する調査（バーミンガム市、ブリストル市ほか）、2009年12月17日～12月31日　科研奨励金（関大）によるニュージーランド都市の都市構造に関する調査（オークランド市、クライストチャーチ市）、2010年1月21日～1月25日　科研費によるベトナム・ハノイ市の都市構造と都市発展に関する予備調査（ハノイ市）、2010年3月7日～3月25日　科研費によるオセアニア都市の都市交通と中心地に関する調査（オークランド市、ブリズベン市ほか）。

野間晴雄：2009年4月17日～21日、GCOE経費によるベトナム国フエでの周縁プロジェクト打ち合わせ、2009年8月17日～21日、私費による韓国（ソウル、光州、木浦、珍島、順天、釜山）視察、2009年8月28日～9月14日、GCOE経費によるベトナム・フエにおけるフィールドワークの引率・指導・現地調査、国際シンポジウム発表、2010年1月29日～31日、私費による韓国（ソウル・水原）巡検。2010年2月25日～3月12日：GCOE経費によるインド（コルカタ、ダージリン）とネパール（イラム、ルンピニ、カトマンズ）による茶園調査、2010年3月24日～3月31日、日本学術振興会によるベトナム・ラオスの地域資源に関わる調査と打ち合わせ。

木庭元晴：12月10日～17日　COP15出席（デンマークコペンハーゲン）。

■博士学位論文の提出

下記の芦田氏が2009年11月に博士学位論文を提出し、2010年1月21日に一般公開形式の公聴会・審査が実施された。3月23日に学位が授与される予定。

＜課程博士＞芦田淳一：摂津国総持寺を中心とする歴史考古学的研究（主査：高橋誠一）

■外国研究者の訪問

2010年2月19日（金）～25日（水）にタイ国コンケン大学教育学部（教育工学）のSumalee Chaicharoen准教授が科学研究費で本教室を訪問し、交流を深めた。

東出修一
サラリーマンは一生勉強と言われてから30年。この場を与えて下さいました教室の皆様に感謝申し上げます。課題はこの成果をどう日常業務に反映させるかである。ありがとうございました。

松井僚平
3年コースで大学院に入学し、晴れて修了を迎えることができました。経済学から地理学へ移転した私にとって地理学は人のつながりと風土を知る良い経験になりました。これからも“塵も積もれば地理となる”の精神で意欲的に生きていきたいです。

松田　玲
・・あの青年は人の幸せを願い、人の不幸を悲しむことのできる人だ。それが人間にとって一番だいじなことなんだからね。『のび太の結婚前夜』より　出木杉よりもそういう者に私はなりたい。

叶　晨
関西大学の地理学教室に入って2年間は、上海出身の私にとっていろいろな面で学ぶことが多かったです。この経験はこれから私の人生のプラスになるでしょう。先生を始め良き先輩後輩に恵まれ、楽しい学生生活を送ることができました。ありがとうございました。

芦田淳一
地理学を通じての3年間は、研究を進める上で広い視野をもち物事を多角的に捉えた分析と、現地調査の重要性を認識するきっかけになり、大変勉強になりました。それは、諸先生方の御指導をはじめ、授業や研究会での大学院生の諸先輩、同期生、後輩の発表が、常に数多くの現地調査を実施した上で、物事を捉えた発表であったからだと思います。本当にありがとうございました。

随想

栃木県、北部足尾山地付近の調査から教えられたこと

石井　孝行

奥日光と尾銅山付近を含む足尾山地北部で山地斜面の調査を始めたのは1965年（昭和40年）である。最初の6年間の院生時代は日光男体山の薙（崩壊谷）の谷壁斜面の変化、基盤山地の斜面で生じる凍結・融解による表層土の移動ならびに足尾精錬所付近で発達するテイラス斜面についての大学院の巡検を兼ねた講座の共同調査である。

日光男体山の谷の場合は火山体を刻む谷壁斜面が豪雨によって如何に変化するかの調査である。豪雨の機会、とりわけ谷壁斜面を変化させるような豪雨に遭遇することが必要である。大学は東京の大塚にあった。当時の大学事務の方の理解のもとに大塚から100km以上離れた日光まで、住所を移すことにより通学定期を購入することができたので、豪雨が襲来したならばいつでも現場に急行できるようになった。ある日、関東地方に台風が接近するということで、急遽男体山に赴き、調査対象とした観音薙を標高1500m付近まで観察することができた。結構、雨は強かったが、異常がなく、当日は二荒山神社（標高約1300m）にお願いし宿泊のお世話になった。その際、神主さんから神社の横に発達している調査谷が明治年間頃に形成されたこと、男体山の東斜面に発達する大薙は江戸時代に形成されたことなど有意義な話を聞かせてもらった。そのとき、火山体を刻む開析谷の形成が非常に新しい場合があることを知った。般若湯の影響もあって目覚めたのは翌朝5時で、その時に雨はすでにあがっていた。早速調査に出かけ、観音薙の源頭部（標高およそ1800m）まで谷の状況を調査した。そこでみた光景は谷に建設された砂防堰堤の多くが移動し、破壊されているものだった。無傷の堰堤は前面基部が掘削されていた。このような状況は豪雨に伴って谷床で発生する流水では説明できない。谷床で発生したのは土石流のようであり、それによって谷床は1m以上も下刻された。もしこのような偶然の異常現象が調査谷で発生しなければ、修士論文の作成は無理であったかもしれない。

凍結・融解による斜面物質の移動に関する仕事は学園紛争が激しくなった頃である。調査のなかで、華厳の滝付近の山地斜面でプロファイルの測量をしていたときである。測量も終わり、尾根付近で一服していると、斜面基部付近を体長1mほどの熊が麓をゆっくりと横切ろうとしていた。調査のはじめに斜面基部の木の幹に熊の毛らしきものが付着しているのをみたので、熊が出没するかもしれないと思っていたが、予想が当たってしまった。万一熊が接近してくるならば、背後は数100mある大谷川の断崖であり逃げるわけにもいかず、熊も私に気づいていたようで（無視か）、運良く姿を消してくれて、ほっとした思いがある。失敗もある。採取した土層の有機物含有量を分析するために蒸留水を作っているときに席を外し、その間に冷却水が床に溢れ、漏水が階下の生物学実験室で培養実験をしていたシャーレに滴下し、実験が台無しになったと、すごく怒られたことがある。全く私の不注意である。他方、凍結・融解実験を行いたいと思い、アイスランドの研究をなされていたお茶の水女子大学の浅井辰郎先生にお願いし、研究室の大型冷凍庫を数か月間使用させてもらった。その間、浅井先生から有意義なお話しを拝聴することができた。この実験は野外の地形プロセスを理解するために重要であり、この室内実験は最初の実験であると同時に、私の後の研究に室内実験を導入する契機となった。

足尾精錬所付近のテイラスの調査は1970年初頭から結構長く続いた。この端緒は、院生時代に行われた講座の研究プロジェクトの一つである「崖錐」の調査が行われたことにある。その際、メンバーらによるテイラス堆積物の解釈に解せないことがあったことと、人の踏み込みでテイラス斜面が50m以上にわたって崩れ、二度とこのような崩流は起こらず、その理由が分からなかったことである。これらを契機として、就職してからも夏休みと冬休みの毎年2回、足尾に通った。夏の調査で怖いのは雷雨である。当時の足尾ダム付近は無植生の状態であり、雷から避難する場所もなく、岩陰に隠れれば上から土砂と水を浴びることになる。しかし、テイラス斜面を破壊して新しく発生した土石流堆積物を観察することができ、テイラス斜面が崩壊し、土石流が発生することを知った。冬休みの足尾行きは、大学院の巡検を兼ねたものが多く、昼食の準備に苦労した。とくに水とコンロの火力の確保である。現場では落下実験、乾燥岩屑流発生実験、ある時は土石流堆積物のトレンンチを掘るだけで終わった年もある。そして、常に落石の危険があった。院生の巡検で怪我が無かったのが何よりである。

足尾での野外観察と実験を通して、テイラス斜面形成過程について少し分かるようになったが、まだ相当分からないことがあった。その後の室内での土質試験、室内実験を通して野外で解釈できなかったテイラス斜面に関するプロセス、メカニズムもささやかながら理解できるようになった。このことは多くの人々の協力によるものである。

（大阪教育大学名誉教授、関西大学・非常勤講師）

千里地理通信　第62号
2010年3月20日　発行
関西大学地理学研究会
〒564-8680　吹田市山手町3丁目3－35
関西大学文学部地理学・地域環境学教室内
編集担当：伊東　理　佐藤ふみ
TEL：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）
e-mail：moto@kansai-u.ac.jp
URL：http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~moto/KU_Geography/
郵便振替：大阪00970－4－81149